

農業生産法人 株式会社ミヤモトオレンジガーデン

中国四国農政局長賞

| | |
|--------------------------------|------------------------------------|
| 団体名：農業生産法人 株式会社ミヤモトオレンジガーデン | 面積：4.8ha 構成員：14人 |
| 所在地：愛媛県八幡浜市 | 栽培品目：温州みかん、かんきつ類 |
| 応募区分：個別経営の部 | 認証：GLOBALG. A. P.、ASIAGAP、 個別認証 |

取組の紹介

【GAP システムと連動した新技術の開発】

- 新規就農から短期間で、みかん・かんきつ類では国内初となるグローバル GAP、ASIAGAP の認証を取得。認証取得に当たり、コンサルタントや特殊ソフトは使わず、自社独自で内部検査などを行い、取得コストを大幅に抑制した。自社で GAP 認証取得支援システムを開発、その後も新技術の開発を継続し、令和 2 年に GAP システムと連動した新選果機を導入。青果のみならず加工品を含めた全ての商品を対象にトレーサビリティを確立している。このほか、地元企業・大学と連携して GAP システムを通じた農業散布用ドローンや収穫ロボットなどを利用し、作業リスク低減や生産性・労働負荷の見える化について協議している。

【GAP の継続に向けた取組】

- 平成 30 年度から毎年新たな社員を GAP プロジェクトリーダーに任命。社員が主体となって GAP に取り組んでいる。JGAP 指導員資格を持つ社員は 6 名、JGAP 団体研修終了 1 名、GLOBALGAP 内部監査員及び検査員資格取得者は 3 名。
- 令和 2 年から他の農家に向けて社員参加で GAP システムの利用方法の説明を行っている。このことで社員の GAP への理解が深まり、社外の利用者は現場目線で GAP に触れることができるという好循環になっている。

【地域と連携した取組の推進】

- これまで 30 農場以上の農家や教育機関に GAP システムを提供し、GAP 取得を支援した。県立高等学校・農業大学の GAP 認証取得支援では、無償で GAP システムを提供している。初めて GLOBALGAP の取得を支援した地元の高等学校の卒業生が農業大学校を経て GAP の価値を理解して入社したほか、県外からも GAP への取り組みを評価して入社する社員がいる。
- 愛媛県内外の行政機関等において、幅広い参加者に向けた講演、発表を行っている。



自社で GAP 認証支援システムを開発



GAP システムと新選果機の連動



「GAP 農業経営 web セミナー・動画配信サービス

おかやまオーガニック

有機農業・環境
保全型農業部門

中国四国農政局長賞

団体名：おかやまオーガニック

面積：2.2ha

所在地：岡山県岡山市

構成員：6人

応募区分：人材育成の部

栽培品目：水稲、野菜

取組の紹介

【Uターン就農から有機農業経営の確立】

- 平成7年に代表が東京から岡山へ帰郷し、家族の健康を思い近隣の農家から有機農業を学び始めたのがきっかけで技術習得を進め、慣行ほ場を有機ほ場に転換、平成13年にはおかやま有機無農薬農産物（有機JAS）の認証を取得。平成15年「おかやまオーガニック」設立。現在は、6名（5戸）が約2.2haで水稲、野菜の有機栽培に取り組む。特に土づくりにこだわり、約60品目の少量多品目生産で年間を通じた出荷を行っている。



有機野菜の栽培

【新規就農者支援】

- 栽培技術や経営に関する実践的な研修を行うとともに、就農者のために予めほ場の確保を行い、有機JAS認証ほ場への転換を行うことで、就農と同時に有機農産物の生産に取り組める体制を構築し、経営者として独立できるよう支援を行う。これまでに市やJAと協力し4名（4戸）を新規就農させた。現在の構成員のうち代表以外の4戸は県外からの新規参入であり、それぞれ専業で経営を確立させている。
- 販路については各生産者が独立して開拓するが、新規就農者へ一部を引き継がせるとともに、生産量が確保できるまでは不足分を組織全体で相互にフォローする等、早期の経営安定を支援している。



公開ほ場での現地研修

【地域と連携した取組の推進】

- 平成29年より全国からの受注を開始。また、規格外有機野菜を使用した「ベジタブルブロス」（有機野菜だし）を開発、同年1月に六次産業化法に基づく総合化事業計画の認定を受け、販路拡大を進めている。
- コロナ禍においては、営業短縮となった取引先ホテルの若手料理人を招いて農作業に従事してもらう交流活動を行い、相互の信頼構築と地産地消への理解を深めるなど、逆境下にもありながらも将来を見据えた取組を進めている。



商談会（アグリフードエキスポ）

団体名：広島県立庄原実業高等学校 面積：0.1ha
所在地：広島県庄原市 構成員：11人
応募区分：団体の部 生産品目：鶏卵

取組の紹介

【校内生産の鶏卵の高付加価値化へ】

- 広島県立庄原実業高等学校の生物生産学科3年生に在籍する11人が鶏卵についての授業をきっかけにアニマルウェルフェアと平飼いによる高付加価値化の可能性に興味を持ったことから、令和3年度から実習農場で生産される野菜等残渣の有効活用を視野に、平飼いによる資源循環型農業の実証に取り組むこととなった。また、京都大学からシロアリの破壊的木材分解能力を利用してシロアリを繁殖・飼料化し、鶏に給餌する研究の協力依頼を受け、データ収集と実証に取り組んでいる。

【資源循環型生産に向けた取組】

- 鶏舎の飼育環境を整備し、品種名「もみじ」を116日齢で50羽導入。現在、鶏の生育記録、給餌記録、産卵記録等の調査中であるが、野菜残渣等の活用、稲わらの活用、シロアリの給餌、及び平飼いの床土の畑への還元等を通じた資源循環型農業への貢献、並びに平飼いによる生産性の向上について検証している。
- 野菜等残渣の活用及び未利用木材を利用したシロアリの繁殖・給餌等により、濃厚飼料に依存した経営からの脱却を図り、資源消費型から資源循環型農業生産に転換する。また、平飼いを開始してからは鶏舎からの悪臭が大幅に軽減されたほか、ハエなどの衛生害虫も減少したことから、近隣地域への臭気対策にも効果がみられた。

【地域と連携した取組の推進】

- 生産した鶏卵はオープンスクールや校内で販売しており人気が高い。今後は農業高校による資源循環型鶏卵としてブランド化を目指し、地域のスーパーでも販売できるよう鶏卵の安定生産に務めている。
- 週1回校内に農産物・加工品の販売所を開設している。ここで地域住民と交流する機会を活用し、地域住民に取組内容を伝え、理解の推進を図っている。



生徒が鶏舎を整備



平飼いの鶏舎内



未利用木材を利用した給餌用
シロアリの繁殖
(京都大学での研究に協力)